

汽車は走る

小川未明

青空文庫

春風はるかぜが吹くころになると、窓まどのガラスの汚れよごがきわだつて目めにつくようになりましした。冬ふゆの間あいだは、ほこりのかかるのに委まかしていたのです。裁縫室さいほうしつの窓まどからは、運動場うんどうじょうの大きな桜おほさくらの木きが見みえましした。

「あの枝えだに花はなが咲くのは、いつのことか。」と、ちらちらと雪ゆきの降ふる日ひに、外そとをながめながら思おもったのが、はや、くつきりと枝全えだぜん体んたいにうす紅べにいろ色いろを帯おびて、さんご樹じゆを見みるような気きがするのです。そして、一つ一つの、つばみがふくらんで、ぷつぷつとして、もうそれが開ひらくのも間まのないことでありましした。かよ子こは、このごろ、裁縫さいほうをしながら、ときどき思おもい出だしたように頭あたまを上げ、

外そとをながめるのが楽たのしみでありました。

「ねえ、みんなで、窓まどのガラスをふきましようよ。」

「こーい出だしたのは、かよ子こでありました。

「ええ、ふきましよう。この前まえ、おそうじしたのは、いつだったか。ずいぶんしなかつたのね。」

「寒さむいんですもの。空そらは暗くらかつたし、する気きになれなかつたでしょう。」

この四月がつ、卒そつぎ業ようする高等科こうとうかの生徒せいとたちは、なんとなく気き持もちが浮うき浮うきとして、明あかるく元げん気きでした。

「吉田よしださんは、東とう京きょうへおいきなきるつて、ほんとうですか。」
と、年寄としとつて、もう髪かみに白毛しらの見える先せん生せいが、いわれました。

「叔母さんが、おてつだいをしながら、もうすこし勉^{べん}勉^きをつづけたらといいますので。」と、かよ子は答^{こた}えました。

「それはけっこうなことです。このお教^{きょう}室^{しつ}では、あなたのお母^{かあ}さんもおけいこをなさったのですよ。お母^{かあ}さんは、どの課^か目^{もく}もよくおできになったが、お裁^{さい}縫^{ほう}もお好^すきでした。いまのお子^こさんたちは、どういうものか、お裁^{さい}縫^{ほう}がきらいですが、これからの日^{にっ}本^{ぽん}の婦^ふ人^{じん}は、ひととおりのお仕^し事^{ごと}ができなければ、大^{たい}陸^{りく}へもいけないと、校^{こう}長^{ちょう}先^{せん}生^{せい}もおつしやっておいでです。」

「それで、私^{わたし}、東^{とう}京^{きょう}へいったら、夜^や学^{がく}にでも通^{かよ}って、洋^{よう}裁^{さい}を習^{なら}おうかと思^{おも}うのです。」

「いいお考^{かん}えですね。時^じ勢^{せい}がこんなですから、衣^い服^{ふく}のほうも働^{はたら}き

いいように改か良りされましようし、私わたしなど、こうおばあさんに
なつては、新あたらしい研けん究きゆうは骨ほねがおれますし、若わかい人ひとにやつても
らわなければ。」と、先せん生せいは、いわれて、さびしそうに笑わらわれ
ました。

かよ子こは、お母かあさんが、まだ生せい徒との時じ代だいから、この学が校っこうに教おし
えていられる先せん生せいの生せい活かつを考かんえると、なんとなとく尊とうく頭あたまの下さ
がるような気きがしました。

しばらく、かよ子こは、うつむいて、だまつてお裁さい縫ほうをしてい
ました。

はじめにお母かあさんにつれられて、この学が校っこうへ上あがったとき、
お母かあさんは、あの桜さくらの木きの下したに立たって、自じ分ぶんたちが遊ゆう戯ぎをするの

を見ていられた。ちょうど桜の花が満開であった。風の吹くた
びに、ちらちらと花が散つたのを記憶している。もうすぐに、幾
くねん
年めかで、その季節がめぐってくるのだ。

また、秋の運動会の日であった。それは、自分が六年生の
あき うんどうかい ひ
ときであつたが、徒歩競争に出るのをお母さんは、やはり、あ
とほぎようそう で
の桜の木の下に立つて見ていられた。桜の幹から、校舎の窓に
さくら き した た み
はりわた
張り渡してある綱には、無数の日の丸の旗や、満洲国の旗や、
ちゆうかみんこく はた
中華民国の旗などが、つるしてあつた。夏の末ごろから落ち
さくら き は
はじめる桜の木の葉は、もはや幾らもついていなくなつたようだ。
さくら き
そして、昼過ぎから、雨がぽつぽつと当たってきたのだつたが、
ひるす
お母さんは、いつまでも、自分の番組のすむまでは、帰ろうと
かあ
お母さんは、いつまでも、自分の番組のすむまでは、帰ろうと
じぶん ばんぐみ
かえ

もされずに立^たつていられた。

「ああ、あの桜^{さくら}の木^きと、お母^{かあ}さん、そして、このお裁縫^{さいほう}室^{しつ}となつかしい先生^{せんせい}——。」

そんなことを考^{かん}えると、かよ子^こは、もうどこへもいきたくなくなつた。いつまでも自分^{じぶん}の村^{むら}から離^{はな}れたくないような気^きがしたのでありました。

「先生^{せんせい}、私^{わたし}、保母^{ほぼ}さんになりたいと思^{おも}いますの。」と、一人^{ひとり}の娘^{むすめ}が、いいました。

「まあ、西村^{にしむら}さんがどうしてそんなお考^{かん}えをなさつたの。」

先生^{せんせい}は、やせ形^{がた}の背^せの高^{たか}い生徒^{せいと}の方^{ほう}をごらんになりました。「私^{わたし}、子供^{こども}が大好き^{だいす}ですし、これから、村^{むら}に人手^{ひとで}が足^たりなくて、

みんなが働くのに困りますから、子供の世話をするものが入り用だと思つたのです。」

「それは感心です。このあいだの教員会議のときに、この学校にも託児所を設けたらという、先生がたのご意見が出たのですよ。」

「西村さんは、やさしいから、きつといい保姆さんになれるとおもいますわ。」

かよ子は、心から、同感したように、いいました。

じつさい、自分たちが、学校を出た後、村のためにつくさなければならぬ仕事、いろいろな気がしました。授

業が終わって、校門を出ると、たがいに友だちと別れて、か

よ子は、一人さびしい道を歩いていました。

今年は、雪が少なく、暖かな日がつづいたので、田を隔てた、

あちらの丘の梅林には、ちらほらと白く咲きかけた花が、清ら

かな感じを与えました。うぐいすが鳴いています。遠くを見たい

と、前の方から、二人の小さい子供が、この道を駈けてきまし

た。一人は姉で、後からつづくのは弟でした。

二人ともひじょうにうれしそうで、姉のほうが、石けりのまね

をすると、弟もそのまねをするし、姉が飛び上がって、なわ飛び

のまねをすると、幼い弟も、それと同じかつこうをしたのであり

ます。

そのうちに、チャリンという音がしました。弟のほうが、手に

握にぎっていた銭ぜにを落おとしたとみえて、あわてて、あたりをさがしはじめました。それに気づきかない姉あねは、一人ひとりで、先さきの方ほうへ走はしっていたが、後方うしろで、弟おとうとの泣なき声こゑがすると、驚おどろいて、振ふり向むき、すぐにもどって行って、自分じぶんもいっしょになって、落おとした銭ぜにをさがしたのでありました。けれど、ころがった銭ぜには、どこへいったか、見えぬようなようすでした。

いままでの、二人ふたりのうれしそうな姿すがたが、たちまち悲かなしみの姿すがたに変わかわってしまった。

「だから、しっかり握にぎっていればいいのに。」

「しっかり持もっていたんだよ。」

「そんなら落おとしっこないでしょう。」

ちようど、かよ子は、そこへ通りかかったのです。

「とみ子ちゃん、どうしたの。」

「清ちゃんかね、風船球を買うおあし落としてしまったの。」

「まあ。」

かよ子は、いっしよになつて、銭をさがしてやりました。田の

縁になつた道の端に、紫色のすみれの花が咲きかけていた。

その葉の蔭に、五銭の白銅が鈍い光を放っているのです。

ふたり、二人の子供は、また町の方へ向かつて駈けていきました。

「東京つて、どんなところかしらん。」

かよ子は、歩きながら、まだ見ぬ都会のことを考えていました。

これから二、三年勉強強にいく、そして、朝晩いっしよに暮

らさなければならぬ従兄や、従妹のことを——。

だが、四、五日の後には、彼女は、南へ南へと走っている汽車の中に、腰かけていたのでした。

山を一つ越すと、すでに桜の花は満開でした。ある小さな駅にさしかかる前、桜の木のある土手で四、五人の工夫が、並んでつるはしを振り上げて線路を直していました。すこし離れて、監督らしい役人が、茶色の帽子を被り、ゲートルを巻いて、桜の木の下に立って見守っていたのです。その目から口もとへかけて、柔和な顔つきが、どこかお父さんに似ているように思いました。しかも、洋服のボタンが一つ取れて、ひじのあたりが破れている具合までが、無頓着で、直してあげるといってもめ

んどくさがる、お父さんのようすを彷彿させて、気の毒のよ
うにも、慕わしいようにも感じられて、

「いまごろ、お父さんは、お家でなにをしていらつしやるだろう
。」と、しぜんと目に、熱い涙がにじむのでした。

昼過ぎには、どの山々も、うしろに遠くなつて、故郷をは
るばると離れたという心持ちがしました。

ちがった新しい駅に、汽車が着くと、そこは入隊する兵士
の見送りで、構内がにぎわっていました。白い上衣に国防婦

人のたすきをかけた婦人たちがたくさん、かよ子の目に入りま
した。その中の、いちばんうしろに、立っている背の低い人が、

またお母さんそっくりでありました。真つ白な足袋をはいて、手

にちい小さな日ひの丸まるの旗はたを持もつて、笑わらいながら、じつとこちらを見みて
 いました。見みれば、見みるほど、顔かおかたちからかつこうがお母かあさん
 そつくりです。

「お母かあさん。」と、かよ子こは、もうすこしで呼よぼうとしました。

やがて汽き車しゃが動うごくと、そのお母かあさんも、いっしょうけんめいに
 旗はたを振ふつていました。

「万ばん歳ざい、万ばん歳ざい。」

かよ子この頭あたまは、ぼんやりとしてしまいました。こうお父とうさんや、
 お母かあさんに似にた人ひとが、世よの中なかにあるものだろうか、不ふ思し議ぎでな
 らなかった。はじめたびに旅たびをして知しつたのであるが、世せ間けんというと
 ころは、こんなに近ちかしいものどうしの寄より集あつまりだろうか。そう

かんが
考えると、急に悲しみでふさがっていた胸のうちが、だんだん明
るくなりました。

汽車が、ある国民学校のそばを通過しました。広い運動

場では、子供たちが、ボールを投げたり、なわ飛びをしたり、

また滑り台に乗ったりして遊んでいました。この運動場に

も、桜の木が、二本も三本もあつて、下の地は白く、花が散りは

じめていました。

「私の学校の桜は、もう咲いたろうか。」

遊んでいる生徒たちの中には、西村さんもいれば、すみ子さ

んも、とき子さんも、仲のいいお友だちがいるばかりでなく、自

分もまた、いるような気がしました。すると、あのお裁縫室が

浮かんで、先生のお顔が見えました。

お父さん、お母さん、先生、お友だちも、桜もどうかみんな元気で、お達者でいてください。私は、行ってまいります。修

行が終わって帰ったら、そのときは、みなさんのために、力

いっばい働きます……と、彼女は、心に誓ったのでした。

その学校も、運動場も、たちまち後方になって、汽車は、南へ、南へ、と走っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「生きぬく力」正芽社

1941（昭和16）年11月

初出：「日本の子供」

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「汽車《きしや》は走《はし》る」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

汽車は走る

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>